

ピアノ アンドレイ・ガヴリーロフ

Pianist

Andrei
Gavrilov

1955年モスクワ生まれ。父は著名な画家、母はゲンリッヒ・ネイガウス門下のピアニストで、3歳から母にピアノの手ほどきを受ける。モスクワ中央音楽学校でタチアナ・ケストナーに学び、その後モスクワ音楽院でレフ・ナウモフに師事。1974年、18歳でチャイコフスキー国際コンクール優勝、同年ザルツブルク音楽祭でリヒテルの代役を務めて一躍脚光を浴び、国際的な演奏活動を開始する。1980年までに世界の主要都市にて演奏していたが、その後1984年にロンドンでリサイタルを行うまで、政治的理由で国外での演奏活動からは遠ざかっていたが、ゴルバチョフに請願し、亡命することなく国外に滞在する許可を与えられた第一号のソヴィエトの芸術家になった。1985年カーネギーホールでのリサイタルデビュー後、世界の主要オーケストラ、ハイティンク、アバド、ムーティ、ラトル等と共演。また、EMIやドイツ・グラモフォンより多数の録音をリリースし、数々の栄誉を受けるなど国際的に高い評価を受けた。1994年から2000年初頭まではほとんど演奏活動から離れ、哲学や宗教の研究、そして新しい音楽のアプローチ法を模索。2000年から徐々にコンサートを再開し2001年 モスクワ音楽院大ホールにて一夜で4つのピアノ協奏曲を演奏し、完全なる復活を遂げた。以来一層精力的に活動している。

Andrei Gavrilov was born in Moscow in 1955 in the artistic family. He won first prize in the 1974 International Tchaikovsky Competition at the age of 18 and in the same year made a triumphant international debut at the Salzburg Festival, substituting for Sviatoslav Richter. He has subsequently enjoyed a distinguished international career which has included performances with many of the world's greatest orchestras and got many international prizes of CD with EMI and Deutsche Grammophon. His new audio-video album of works by Schumann and Mussorgsky is due to release in November 2020 under his own label UCM in cooperation Da Vinci Publishing.

11.13 金 第390回 定期演奏会

11.13 金 第390回 定期演奏会

中村滋延(作曲家、九州大学名誉教授、相愛大学客員教授)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)

ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466

モーツァルトが1781年に大司教と衝突して故郷ザルツブルクを出奔し、ウィーンに仕事と生活の場を完全に移してから作品。モーツァルト主催による自作自演を中心とする予約演奏会のために1785年に作曲された。フリーランスの音楽家であったモーツァルトにとってはその入場料が重要な収入源であった。

モーツァルトはピアニストとしても当時屈指の腕前を持っていた。その腕前をアピールするために27曲の番号付きのピアノ協奏曲を彼は作曲している。ところがその中で短調はわずか2曲しかない(もう一つは24番ハ短調)。演奏効果に満ちた社交音楽的な色彩が求められる当時のピアノ協奏曲にあっては深刻で悲劇的色彩が強い短調は敬遠された。ところがこの協奏曲にあっては短調は長調の揺らぎとして、言わば表情の膨らみとして扱われていて、長調的な社交音楽的な色彩は減じていない。

この演奏会には父レオポルドがザルツブルクからやってきた。皇帝の「ブラボー」の賛辞を耳にし、ハイドンからは「あなたの息子さんは私が個人的に、あるいは名前だけで知っている作曲家の中で、もっとも偉大な方です」と直に伝えられた。息子と一緒にすごしたのはこのウィーン滞在が最後となり、2年後に亡くなってしまうレオポルドにすれば苦勞して育てたあげた息子の成功を目の当たりに出来たことは生涯最後の大きな喜びであったろう。

この音楽は伝統的なピアノ協奏曲の様式そのままに急—緩—急の三楽章からなる。第1楽章のソナタ形式は古典的協奏曲の約束に従って管弦楽のみの第一提示部と独奏楽器を中心とする第二提示部を持つ。また第1楽章と第3楽章はともに終結部に入る前にカデンツァ(独奏者の演奏技巧を誇示するための即興演奏)が挿入されている。

第1楽章は低音域でのあえぐようなリズムの第一主題によって始まる。アクセントとして機能するごく短い音階上行音型が印象的だ。楽式理論上での第二主題は第二提示部に入ってからようやく登場する。ただしそれ以前に魅力的な主題をいくつか耳にするので、楽式の理解にとらわれず音楽の流れに耳を委ねたい。

第2楽章は三部形式。冒頭、独奏ピアノで奏される変ロ長調の主題はやさしく明るさを感じさせる。中間部は一転してト短調の激しい音楽になり、ピアノの運動性が強調される。この対比がこの楽章の大きな魅力の一つである。

第3楽章は短調であるが軽快なテンポの運動性によって深刻で悲劇的な要素とは無縁である。第二主題は調の設定や音型の外形などが楽式の常識から言えば規格外なのだが、それ故にこそ印象的で魅力的。

作曲／1785年2月10日 初演／1785年2月11日、モーツァルトのピアノ独奏、ウィーン市の集会所ツアー・メーラー・グラーベ(Zur Mehlgrube)での予約演奏会 編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部、独奏ピアノ
使用楽譜／ベレンライター出版

ルードヴィッヒ・ヴァン・ベートーベン (1770-1827) 交響曲 第3番 変ホ長調《英雄》作品55

規模においても、表現幅においても、また内容の深さにおいても従前の交響曲と段違いの大きさを示す。これまでの交響曲は演奏時間の長いものでも30分前後にしか過ぎなかったが、1804年に作曲されたこの曲は50分以上もかかり、楽器編成は完全な2管編成の上にホルンが3管に増え、音強最大記号は**f**を超えて**ff**となり、内容的には例えば第二楽章は葬送行進曲と銘打たれて表現内容を明確に主張する。

この交響曲は「英雄」というタイトルがついているが、英雄の生涯を描いた標題音楽ではなく、スケールの大きさ故の「英雄的な交響曲」の意味である。当初はナポレオンに捧げるつもりで作曲したが、彼が皇帝になったことに怒って献呈の辞を取り消したというエピソード

ドがよく知られている。ただしその真偽のほどは定かではない。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ(速く、生き生きと)、変ホ長調、4分の3拍子。ソナタ形式。冒頭、全楽器による主和音が2回連打される。その後すぐに主和音を分散和音形に置き換えた第一主題が続く。単純な外形だが、それだけに展開の様子がわかりやすく、他声部との多様な絡み合わせも可能になる。推移主題は引っかけるような短い動機をつなぎ合わせた活発な感じの楽想。第二主題は同音反復による引きずるような感じの旋律で第一主題とは対照的。特徴的なのが再現部の直前に変ホ長調の属七の和音の上に主和音に基づく第一主題が現れることだ。ベートーヴェンの単なる書き間違いという説もあるが、主題が霧の中に浮かび上がってくるような効果は明らかに意図されたものと思う。

第2楽章はアダージョ・アッサイ(ひじょうに緩やかに)、ハ短調、4分の2拍子。三部形式。最初に弦楽合奏で主題が現れる。それ以前の管弦楽曲ではつねにチェロのオクターブ下で音を重ねていたコントラバスがここでは独立した声部として扱われている。この楽章ではオーボエの活躍が目立ち、その楽器としての魅力を堪能できる。

第3楽章はアレグロ・ビヴァーチェ(速く、活発に)、変ホ長調、4分の3拍子。トリオを中間部とする三部形式。主部は無窮動で急速に動きまわり続ける音楽であり、中間部トリオは一転してホルンの三重奏が狩りの合図のような音楽を奏する。

第4楽章はアレグロ・モルト(ひじょうに速く)、変ホ長調。4分の2拍子。変奏曲形式。フーガのように展開される部分もあり、大曲を締めくくるにふさわしい豊かな内容と盛り上がりを見せる。なおこの主題は1801年作曲のバレエ音楽《プロメテウスの創造物》で最初に使われ、翌年の《15の変奏曲とフーガ》変ホ長調の主題にもなっていて、ベートーヴェンお気に入りのじつに魅力的な主題である。

作曲／1804年 初演／1805年4月7日、作曲者指揮、アン・デア・ウィーン劇場 編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦5部
使用楽譜／ブライトコプフ&ヘルテル

※編成は使用楽譜に基づくもので演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。